

「受け入れよう

人生いろいろ、生き様、死に様」

97歳のおばあさんが「先生、私は三途の川の夢を見たんですよ。川向こうはとってもきれいでね、見たことのない色だった。私はいつ死んでもいいのや」と笑い飛ばしておられた。私なら本来の三途の姿である地獄の夢で悶え苦しむであろうかと思いつつ、この97歳の方の生死一如の境地、明るさが羨ましかった。

とにかく長命の時代になった。これから超高齢者の人口が急速に増え続け、団塊の世代の方々の多くが90歳以上まで長生きをすると予測される。ところがほとんどの方々は「いや私はそんなに長生きしませんよ。けっこうです」と想定外の他人事のようにおっしゃる。しかし現実には「なかなか死ぬない」。生かされている「死を待っている人」が実に多い。現在、日本の文化の中で「死の準備教育」は育まれていない。高齢者医療の現場では「命は地球より重い」「なぜ死ぬの」「なぜ放っておくの」「なぜ入院させないの」といった価値観に引きずられ、生老病死の自然の摂理はなかなか受け入れられず、人間科学ではなく自然科学としての医療での解決を追い求める姿がまだまだ多い。しかも高齢者自身の想いとは逆に、家族や周辺の人が「善意」として、疑問さえ持たずに医療を優先する。さらに寝たきりや低栄養などに「なってから」、治療をしている。前

始末としての予防の知識や対策も普及し、自助努力をなさっている方も次第に増えつつあるが、「安らかな自然死：老衰」で納得できる人生の幕引きを迎える方々はまだまだ少ないと言えよう。「お任せ医療」「家族が決める終末期医療」が現在の日本の文化で、「本人の意思決定を尊重する」、自立・自尊の文化には程遠い。また、病院は天寿を全うするに相応しい場なのかという問題もある。生涯、自在に生きるに相応しい場、条件が人それぞれにあるのではないだろうか。「自ら、口から食べられなくなれば寿命」「下の世話になるときは寿命」などの選択が必要かもしれない。「ただ長生きすることよりも、自立・自尊・自在に生きることを大切にす」といった価値観、自己主張を許容していく社会文化を築かねばならない。このままでは安心して老後を迎えられないのである。

医療法人財団天翁会 相談役 天本 宏

◇ PROFILE 天本 宏 (あまもと・ひろし)

1969年、東京慈恵会医科大学卒業。73年、聖マリアンナ医科大学神経精神科医局勤務。80年に天本病院を開設し、95年、医療法人財団天翁会設立、理事長に就任。2016年、同財団理事長を退任し相談役に就任。現在に至る。老人の専門医療を考える会初代会長、厚生省老人保健審議会委員、東京都医師会理事、多摩市介護保険運営協議会委員、聖マリアンナ医科大学臨床教授、(公社)日本医師会常任理事、地域包括ケアシステム研究会委員等を歴任。ダイヤ高齢社会研究財団 理事。